様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１１８５

研究課題名（和文）「ウォーター・ミュージック」を演じるバヌアツ女性における文化実践過程の研究

研究課題名（英文）Cultural process of Vanuatu women 'Water Music' performers

研究代表者
諏訪　淳一郎（Suwa, Jun'ichiro）

弘前大学・国際連携本部・准教授

研究者番号：４０３３６９０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：バヌアツ・ルガンヴィル市近郊では女性のみに伝承が許された「ウォーターミュージック」が上演されている。ウォーターミュージックはバヌアツ北部に位置するバンクス諸島の一部の島々で女性が水浴する際に周囲に注意を喚起するために出す独特の音がもとになって、都市部に一住してきた住民によって歌や振付が加えられて伝統芸能化したパフォーマンスである。メラネシアでは女性を担い手とした在来音楽や芸能は少数派であるが、ウォーター・ミュージックの事例は女性たちが積極的に参与することによって、移住者のコミュニティの中で社会的に自立した存在として振る舞っており、共同体の持続可能性に大きく寄与していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の研究では、オセアニアの女性たちが音楽芸能の担い手となる事例を見つけることが容易ではなかった。それは伝統的な価値観が、音楽や舞踊などの表現について、おもに男性による儀礼等の文化行為に結び付けて実践されていたからであった。しかし、このウォーター・ミュージックはメラネシアのバヌアツにおいて女性が音楽芸能における主体的役割を果たすことが分かった。すなわち、ある一定の社会文化的条件においては、これらの地域社会においても女性による音楽芸能が産出するということを明らかにしたのであり、そうした新たなメラネシアの文化的文脈においては、今後ますます女性による活動が盛んになることが予想できた。

研究成果の概要（英文）：The water music is a performance practiced by women in a diaspora community in Luganville, Vanuatu. The performance originates from an island community in the Banks Islands, where women would make loud noises as they let other villagers know that they are bathing. The members of the diaspora community arranged the sound of water into a public performance by adding singing and choreography. In Melanesia, women are minority in terms of music-making. However, this particular case of water music indicates that the women can take initiative at communal level. As a result, the women's participation in traditional dancing, as it has been observed by field research, enhances their social position in everyday interactions in the community, and, therefore, it interacts as an important factor for communal sustainability.

研究分野：文化人類学

キーワード：音楽　メラネシア　バヌアツ　女性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

メラネシアの女性に着目した音楽芸能の研究はまだ行われておらず、バヌアツ・ルガンヴィル市内のバンクス諸島出身者によるウォーター・ミュージックの実態について明らかになっていなかった。これまでは、上演者自身による SNS 配信や訪問客による動画サイトの投稿、またいくつかの紹介論文といった断片的な形でしか明らかになっていなかった。また、それらの資料も女性によって上演される実践面に注目して扱ってはいなかった。

２．研究の目的

フィールドワークによって以下の 4 つの点を明らかにすることを目的とした。

①ウォーター・ミュージックの上演がどのように実践されているのかを民族誌的にデータ化すること。民族誌的なデータとしてのウォーター・ミュージックに関する記述は複数の上演を出来事として扱いながら、それらを重ね合わせて全体像を描き出す必要があった。

②ウォーター・ミュージックで使用されている歌曲や踊りについてテクスト化し、その意味合いや由来について理解すること。ウォーター・ミュージックの上演は歌を一緒に歌っている。これらの歌のテクストはバンクス諸島の一部で話されているメレラヴァ語であるため、直接話者にあたって通訳してもらう必要があった。加えて、どのような経緯によってそれらの歌が歌われることになったのかについて詳細に聞き書きする必要があった。

③ウォーター・ミュージックが当該社会のその他の音楽芸能等とどのような関係性にあり、またどのようにしてその関係性が産出するのか、という文化的相互作用の諸局面。レウェトン地区では、女性のみによって演じるウォーター・ミュージックのほかに男性のみによって演じる在来舞踊がいくつか存在することが予備調査で確認できていたので、それらについても考察を深める必要があった。また、メラネシアの多くの村落で培われているギターバンド音楽である「ストリングバンド」についても聞き書きする必要があった。

④ウォーター・ミュージックが実践される背景にある社会関係。ウォーター・ミュージックを上演する時に発生する謝金の分配、メンバー構成、状況学習の過程、リーダーシップのあり方、活動範囲、頻度、期間などといった細かい点について詳細に民族誌化していく必要があった。

３．研究の方法

予備調査を実施したのちに本調査を行うという計画であった。コロナ禍による中断があったものの、3 年目に 4 日間の予備調査を実施し、ルガンヴィル市近郊のレウェトン地区に滞在しながら現地のウォーター・ミュージックの概要についてフィールドワークを行った。まだ観光客はほとんどいなかったが、ウォーター・ミュージックがレウェトン地区に常設されたプールを使用して行われていることが確認できた。

移動が自由となった 4 年目に 3 週間のフィールドワークを実施し、上記の目的に従って参与観察を実施した。本調査の期間は、女性の研究協力者イリナ・グリゴレを同行した。これはウォーター・ミュージックが女性によって上演される音楽芸能であるために、男性である本研究者が構築できる信頼関係には限界があると予備調査で分かったためである。本調査の期間はレウェトン地区に常設されていた宿泊施設に起居し、現地の人と行動をともにしながら参与観察を行った。これにより緊密なラポールが醸成され、調査終了後も相互に連絡を取り合うなど良好な関係を作ることができた。

４．研究成果

フィールドワークでは、以下の出来事について民族誌的データをとることができた。

①　レウェトン地区にオプショナルツアーでやってくる観光客を対象としたウォーター・ミュージックの上演とそのテクストの解読。ウォーター・ミュージックだけでなく、男子の在来舞踊も踊り手が確保されれば行われることが分かった。また上演者には年齢の制限がなく、小学生の児童も加わっていた。このようにコミュニティ総出でウォーター・ミュージックは上演されていた。衣装や楽器の材料として、男女とも木の葉や蔓を近在の二次林のあちこちから入手していた。したがって、レウェトン地区の周辺環境が音楽芸能の存続に非常に大きな役割を果たしていることが分かった。また、上演者は必ずしもメレラヴァ島民やメレラヴァ語の話者ではなく、家族関係によってレウェトン地区に居を構えているのであり、厳密に出自がスクリーニングされ

るのではないことが分かった。

② ルガンヴィル港近辺の島に立地する観光施設のディナーショーでのウォーター・ミュージックの上演とそこで顕著となったポストコロニアルな文化作用の局面について。上演者は観光客とのつながりが一時的かつ一過性であり、そこにおける報酬も現金で決済されていたが、その理解の仕方には在来社会に見られた互酬と再配分の考え方が色濃い影を落としていた。すなわち、音楽芸能が「良きもの」としての現金に等価交換されるのではなく、パフォーマンスは現金の支払いという贈与を誘発する行為としてとらえられていた。このことは、上演中に歌われる歌謡のいくつかが贈与を期待する内容の歌詞を持っていることから理解できた。これらのことから、贈与の在り方についての考察が今後メラネシアにおけるポストコロニアルな社会的局面の理解に新たな展開をもたらすことが予想できる。これは注目すべき成果の一つに挙げることができるだろう。また、このことは、ラポール形成のために本研究代表者の女児二人を同行させたところ、すぐにかれらも観光客相手の上演者としてウォーター・ミュージックに参加することが促されたことからもわかる。女児たちは現地の子供と遊ぶようになっており、もはや観光客との間に発生するような取引の関係にないということが認識されたためと考えることができる。

③ トルバ州出身者で組織し、トルバ州出身者を対象とした、ルガンヴィル市の市政記念日における行事の一部始終。「トルバ・デー」と題されたこのイベント、バンクス諸島の同郷者のみを対象として有料で行われた。レウェトン地区の上演者は必ずしもメレラヴァ島民ではないが、音楽芸能の担い手として参加が許された。プールを仮設することができず、男性のみが上演した。つまり、名目上は同郷者間の中隊を再確認するイベントであったにもかかわらず、内実はたまの「お祭り気分」に浸るというもっと緩やかなものであったことが分かった。しかしながら、こうしたイベントは音楽芸能を披露する貴重な機会でもあるため、地域社会に重要な役割を持っていることも分かった。

④ その他、ファイアーダンス、ストリングバンドの上演。ファイアーダンスはタンナ島の火祭りが起源の芸能であるが、若者向けの研修施設でパソコンの操作のような実務的な技能とともに学ぶことができ、ある程度上達すると、観光施設のディナーショーなどで上演するようになる。これにはどの島の出身者かということは全く関係がない。ストリングバンドに熱心な若者に出会ったが、彼はソロ活動を志向しており、自作の曲も古い南太平洋のサウンドとは違った傾向が認められた。レウェトン地区では現在ストリングバンドは活動していなかったが、ウォーター・ミュージックに使用される曲の中にストリングバンドのものが含まれていた。

⑤ レウェトン地区が造成された経緯、生業など。レウェトンはココヤシの廃園を 1980 年代頃に政府が所有者から長期間借り受けて宅地造成した土地であり、付近にもレウェトンのような区画が広がっていた。その多くは二次林化していた。公共交通機関がないので、市街地までは 40 分ほどかけて徒歩で行くか、タクシーを使っていた。パンなどは移動販売のトラックが巡回し、日用品や菓子は地区内の老婦人が売店を経営していてそこで買うことができた。上下水道は整備され、水洗トイレもあった。最初にレウェトン地区に住んだ女性の家族がレウェトン地区の核になっとり、この女性の尽力によってウォーター・ミュージックが組織されたことが分かった。

上記①～⑤をまとめると、次の 3 点となる。

A) ウォーター・ミュージックはレウェトン地区の成立まもなく新たに作られた音楽芸能であり、それらははじめから観光資源として組織化されていたこと、B) レウェトン地区にバンクス諸島メレラヴァ島民はほぼおらず、そのほとんどが都市で育ったかメレラヴァに出自を持つ配偶者または親の事情によってレウェトンの住民であること、C) ウォーター・ミュージックの上演は繁忙期になるとかなりの手間をとるが、得た謝礼は、ウォーター・ミュージックの担い手を引きとどめておくために、参加者の間に可能な限り均等に配分されていること。

これらのことから、レウェトン地区のみにウォーター・ミュージックが伝承し、メレラヴァ島の母村にも見られないのは、このコミュニティが新たに創出したグローバルシステムとのつながりの様式であったためであり、女性の役割を重視する方向に音楽芸能が進展したのは、レウェトン地区の創成に女性が決定的なかかわりを持っていたからであるということが分かった。まとめると、バヌアツの現代社会では、女性がどのような社会的戦略をもって行為者として存在するかということがポストコロニアルな環境において重要なのだといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Jun'ichiro Suwa
２．発表標題 Performative Interactions, Public Accessibility and Cultural Survival Strategy of Mwerlap-Speaking Community in Espiritu Santo, Vanuatu
３．学会等名 ICTMD Study Group on Music and Dance of Oceania（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 諏訪淳一郎
２．発表標題 バヌアツ・バンクス諸島民ディアスポラ・コミュニティにおける伝統芸能の再生
３．学会等名 日本オセアニア学会第40回研究大会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 諏訪淳一郎
２．発表標題 音楽のヒューマニティ・デザインとポストヒューマニズム：バヌアツのウォーター・ミュージックの事例から
３．学会等名 第57回日本文化人類学会研究大会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 諏訪淳一郎
２．発表標題 リ／ゾナンスへ の人類学的アプローチ趣旨説明
３．学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 諏訪淳一郎
２．発表標題 パプ アニューギニアのダンス 歌謡における在来舞踊の リ／ゾナンス
３．学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 諏訪淳一郎
２．発表標題 音楽を持つ、音楽になる―パプアニューギニアの音楽ジャンルと時空間の生成
３．学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Jun'ichiro Suwa
２．発表標題 The Appropriation of Indigenous Musical Materials in Papua New Guinean Ethnopop
３．学会等名 ICTM Study Group on Music and Dance of Oceania（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 諏訪淳一郎
２．発表標題 パプア ニューギニアのダンス歌 謡における在来舞踊のリ ／ゾナンス
３．学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	グリゴレ　イリナ (Grigore Irina) (90990888)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関